Title	高島佐一郎著 金融経済の諸問題
Sub Title	
Author	堀江, 帰一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.2 (1923. 2) ,p.308(150)- 309(151)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230201-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

高島佐一郎著

金融經濟の諸問題

菊版 本文 五八六頁

英文附録、序文、目次等、實文館發行

定價 金 五圓 五十錢

本書は名古屋高等商業學校教授高島佐一郎氏が最近約二年間に亘つて、公にしたる論文を蒐録して、書籍の形體としたるものなり。題して單に金融經濟の原理と稱すれど、内容は金融經濟を論じたるものと、評傳批評に關するものと、の二部に分たる。前者の内、著者が最も多くの精力を費したりと思はるゝは、第一編「再論米國聯邦準備制度の運用」と云ふ一章にして、曩に世間に問ひたる「聯邦準備制度調査」の後を承けて、合衆國銀行制度の如何に運用せられつゝあるか、歐洲戰時に起れる變動に依つて、如何なる影響を蒙れるかを種々の方面より研究し、結局近時各聯邦準備金銀行の所在地に依つて、營業上の狀況の異なることや、十二銀行の併合による回想録を添へたり。是等の内、ラフリン氏の「貨幣及び物價」に對する批評最も深刻にして、精彩の豊なるを認む。高島氏の紹介したる著書を既に讀了したると否とに拘はらず、氏の紹介文を通じて、益する所少なからざる可し。著者の曩に公にしたる金融關係の著書と共に、本書亦金融專攻者にとつて、價値ある一資料たるを得べし。(堀江歸一)

る回想録を添へたり。是等の内、ラフリン氏の「貨幣及び物價」に對する批評最も深刻にして、精彩の豊なるを認む。高島氏の紹介したる著書を既に讀了したると否とに拘はらず、氏の紹介文を通じて、益する所少なからざる可し。著者の曩に公にしたる金融關係の著書と共に、本書亦金融專攻者にとつて、價値ある一資料たるを得べし。(堀江歸一)

伊東米治郎著 日本の海運

東京 實文館發行

四六版二七五頁附録五八頁

定價 金 二圓 三十錢

本書は、表題の示す通り日本の海運を主題として、其の發達と現状とを叙し且つ今後に於て之に關して採るべき手段政策を論じたものであつて、現に日本郵船會社社長の任に在る伊東氏の筆に成つた新刊書である。

本文は四章から成つて居る。第一章に於て日本海運の太古より歐洲戰亂中に至るまでの沿革

關して議論の起りつゝあることを擧げて、全編を結べり。約八十頁に近き論文にして、米國銀行制度研究者にとつて、指鍼たるを失はず。第二、第三の兩編は事業經營の形式と金融機關との關係を論じたるものにして、マーシャル氏の Trade and Industry に於ける研究の成果を利用し、評論し、傍ら企業に關する最近の事實を收容し、殊に第三編に於ては、對外債權に就て、内外諸國の時事問題を論評し、第四編に移りて、金融組織に關する諸問題を概括し、第五編に於て我國銀行組織の缺陷を指摘したり。其中に於て、我國銀行界を通じて、集中運動の行はれざるを難じ、又小口當座預金、定期預金に重きを置くの事實を擧げたるが如き、最近に起れる我國銀行界の破綻と對照して、興味を覺ゆるの議論とす可し。

第二部に蒐録せられたるは、著者が最近讀過したる貨幣金融關係の新著に對する評論若しくは梗概の紹介を主なるものとし、故大西猪之助氏并にサー、イングリッシュ、バルグレイヴに對する發達を外形的に叙し、第二章に於て海運補助の理由と方法とから始めて我國に於ける航路並に航海に對する補助の沿革、造船並に海員に對する保護施設の沿革を述べて國家的施設乃至は援助の跡を示し、第三章に於て、斯くして發達される本邦の海運は如何なる現狀に在るものなるやを種々の方面から叙述して其の世界に於ける地位を明かにして居る。然るに此の地位は、假令近年急速に向上したとは云へ猶ほ且つ不充分なる所が少なくないから、此の地位を維持し進んでは更に之を向上發達せしむるの手段を講ずることが必要になる。是れ第四章「日本海運の將來ある所以であつて、思ふに此の章が本書の眼目」とする所であらう。即ち第一の節に於ては海運の維持發達の方策を論ずるのであつて、「海國政策の要諦」として「本邦海運の國際化」を擧げ、特定航路の確立と之に配すべき優秀船建造の要を説き、此の目的の爲めに直接間接に國家的保護を與ふるの必要あることを論ずる。第二の節に於ては海員の保護養成の爲めには如何